

戰時下の大學

教授 岩崎 卯一

戰時下の大學は次のとき三つの面に於て考察されるであらう。

第一は、現にある大學の様相である。謂はば、大學の「存在」を客觀的に「觀察」することである。

此頃、大學の制度と大學生の態度とが、屢々論議の對象として識者間に取上げられてゐる。一方では、

最近の超非常時狀態下に、大學生一般の熾烈なる愛國情熱は愈々昂揚せられ、大學の制度も亦急速に決戰態勢化されつつありと報告されてゐる。他方では、大學のみは

最近に至るも猶ほ自由主義體制の

牙城として殘存し、大學生は依然有識階級的貴族主義の甘夢より覺むるに至つてゐないと非難されてゐる。かかる對蹠的觀察の何れが果して正確であらうか。

第二は、大學の進みつつある方向である。即ち大學の「生成」を客觀的に「豫測」することである。

現に、戰爭と言ふ至上命令は、國內の凡ゆる制度と組織とに苛烈なる變革を強要してゐる。従つて、

二萬三千人の學生數を擁する我國の大學（昭和十三年調査、大學豫科と専門部との生徒はこの數字に含まれてゐない）のみが、何時までも治

進するであらうか。

大正十一年六月十五日創刊
昭和十八年六月十日印刷
昭和十八年六月十五日發行
編輯人 神尾 敬氏 監
大坂市北區堂島
上三丁目十五番地
印刷所 西大宅 谷口印刷所
大坂市大淀區森福
中道三丁目十二番地
發行所 關西大學學務部
會員登錄番號二〇六〇四

目要	第二
校	戰時下の大學……………岩崎卯一(一)
友	戰爭・生産力増強の論理……………松原謙由(四)
内	報……………(五)
報	……………(七)

外法權的既得權を許容される筈がない。一方では、文化系諸大學は

非常時的處置として「近く一時閉鎖」の運命に見舞はれ、恒久的處置として廢止・縮少・統合等の取扱を受けるであらうと喧傳されてゐる。しかし、他方では、官學の

雄たる東京、京都二帝國大學と、私學の覇者たる早・慶二大學とに於て、特に根強き大學自治の傳統と、大學改革に對しては常に龍頭

蛇尾に終りし歴代文政當局の態度とを顧み、我國領土の大部分が

「アツツ島の苛烈」を味はざる限り、「現状維持」の態勢崩れざるべしとの樂觀論も相當に存在する。

今後の大學は果して何れの方向に進行するであらうか。

第三は、大學の採るべき方針である。これは大學にとつて「當爲」の問題である。此點に關しても二の見解がある。其一是、大學を以て國家の要請する學術を振興し、人材を養成する國家機關なりとする建前より、國家の非常時は直に大學の非常時と觀念し、國策に協力すべしと言ふのである。其二是、大學を以て人類文化に貢獻する學問を創造し、世界的識見ある人材を養成する文化組織なりとする立場より、常に「百年の大計」に着目し、戰爭若くは革命のごとき偶發的事象に囚れず、大學を運営すべしと言ふのである。後者は前者を「時流型」と呼び、前者は後者を「超然型」と呼び、互に相手

方を非難する。現下の大學は果して何れの方針を採るべきであらうか。

余は、以上のうち、第一の問題と第二の問題とを取上げて略述したいと思ふ。

二

現在の大學と大學生とは平常時より非常時への急激なる轉換に當面して、名狀し難き困惑を経験してゐるのではあるまいか。かかる困惑は、今日の大學と大學生とに時局の認識が缺けてゐる爲でもなく、自由主義の傳統が横溢してゐる爲でもない。現在の大學生は、卒業と同時に兵役に服し幾年か祖國防衛の第一線に起たねばならぬ運命を痛感してゐる。又、敵アメリカ飛行將校の八割五分までが大學生卒業生であるとの事實を聞いて衷心敵愾心に燃えてはゐる。しかし、新聞に、ラディオに、名士の講演に「大學生よ起て」との激勵を聞いても、現下の大學生は殘念ながら其聲を聞流すだけである。

何故であらうか。起つ「方法」が示されてゐないからである。文政當局と軍務當局とは、戰爭に對應す可き大學の制度と大學生の行態とに對して、決戦期と言はれる今日に至るも、何等「具體的方法」を指示されない。

我國の大學には何の必要あつてか、依然として官・公・私の區別が堅持されてゐる。一方には學生に滅死奉公の理念が説かれても、他方には「私立」を誇として其特色を發揮せよとの訓示が與へられてゐる。元來、私立大學の制度は、英米國家の專賣特許とも言はる可く、ソ聯は固より獨・佛・伊の諸國家に於ては「私立大學」を發見すること極めて困難である。大學の分科・課目・學年・卒業の諸制度も、自由主義華かなりし大正年代に比して少しも變化がない。そのうち、最も着目す可きは、學生の出缺自由制である。嘗て帝國大學が學生の「出缺を調査せざる點」にて範を示したることは、直に他

の官公私立大學の模倣する所と成り、今日にては我國大學全體を通じての傳統として維持されてゐる。従つて、大學本來の講義に對し、學生の出席する否とは彼の自由である。缺席は學生の怠惰よりも教授への不信を意味するものと認められてゐる。然るに、同じ學園にて現役將校に依り行はれつつある軍事教練のみは、出缺の調査厳しく且つ萬事が軍隊式に運ばれてゐる。規律を生命とする軍事教練と、自由を傳統とする大學教育とは、對照の妙を極めつつも、

統一的連絡なく同一大學内に並存してゐる。加之、最近には、大學本來の學科負擔が寸毫も緩和されざるに拘らず、軍事教練・報國隊出勤・修練行事の要求が一時に激増してゐる。學生にして其の何れにも忠實ならんとせば、身心の疲弊に由り、結局倒れざるを得ぬ状態である。唯だ學生は、多年の傳統たる「出缺の自由」を巧に驅使

することに依り、當面を辛うじて處理してゐるのである。

しかし、斯くのごとき大學及び大學生の現状は、決して救ひ難き性格のものにあらずして、次に來るべき飛躍への契機たることを暗示してゐる。若しも政府が部内相互に密接なる連絡をとりつつ「決戦段階に於ける大學運営非常處置」なるものを決定し、之を躊躇することなく全大學に指令せんか、現在の困惑は一掃されるであらう。現在の大學と大學生との切實に求めつつあるは「日本の世界觀」の精神科學的講釋ではなく、大學と大學生をして戦力増強のために起たしむる「方法」の具體的指示である。斯かる具體的指示の内容が、假に文科系大學の「一時閉鎖」であつても、總ての大學生は喜んで之に應諾するであらう。決断の鍵は戰爭遂行最高指導者側の手にあらねばならぬ。

大東亞戦争が今後も相當年間繼續し、且つ戦争様相が漸次苛烈の度を加へ、而も敵味方五角の形勢が持續される限り、我國の大學一般は、欲すると否とに拘らず、左の運命を辿る「可能性」がある。

第一に、我國の大學一般は、作戦及び戦備の必要に促されて、原則として「國營大學」の形態を採るに至るであらう。この事は現在の公私立大學が一躍して従來の官立大學の如きものに轉身する意味ではない。それは官・公・私立各大學が、今後其收容人員と運営形態とに加へられる國家意志の壓力に抗し得ず、従來存したる「差別」乃至「特色」を稀薄化し、一時的なりとも規格統一的國營大學形態に隨從するであらうことを意味する。然し、此處に至る迄には、各大學は各種の利害關係を考慮しつつ「各大學の特色を尊重せよ」との旗印の下に、能ふ限り現状維持を策するであらう。思ふに、現状

維持説を最後まで頑強に主張する大學は、現在の社會一般より最も高き評價を與へられつつある二三の官私立大學であらう。

第二に、我國の大學一般は、作戦上の至上命令、即ち戦争を勝利に導く必要に迫られて、大部分「軍事大學」とも謂はるべきものに變貌するであらう。現在迄は大學内に寄寓せる觀ありし「軍事教練」が、政府の周到なる用意の下に整備強化され、士官學校乃至陸軍大學の課目をも充分に取入れたる「軍事講座」にまで高められ、在學生も軍籍を有し、卒業生も其成績に應じ確實に軍の少壯幹部に成り得るであらう。この爲に、従來への文科的諸學科乃至課目に對しても、臨時的に又恒久的に、果斷なる整理が行はれるであらう。斯かる推移に對する反對的批判は、最早大學内にては勿論、帝國議會内にては之を聞き得ざるに至るであらう。之と同時に、軍關係

の諸學校も其課目範圍を擴大し、高級武官養成學校にては、戰術・戰史に關するもの以外に、政治・法律・經濟に關する諸科學の如きも重要課目として取上げられるであらう。就中、私立大學に於ける軍事教練乃至軍事講座が愈々其重要性を加ふるに伴ひ、國家の費用に依り支辨される軍人又は官吏の教授數が増加し、此等を含む私立大學は、形式的には兎に角、實質的には「私立性」を稀薄化し、場合に依りては之を喪失する可能も考へられる。

第三は、我國の大學一般は、政府が生産力従つて戦力増強の急務に應ずべく、大學生の勤勞動員體制を愈々強化するに伴ひ、一種の「勤勞大學」たるの風貌を帯びるであらう。政府が平常時に於て、如何に學生の勤勞を嫌惡し、時に之を蔑視したるか、帝國大學をはじめ官立大學・高等學校・専門學校に、勤勞學生を對象とする

「夜間部」を、斷じて設置せざりし一事を以ても、之を證することが出来。然るに、戦争の至上命令は、今や政府をして官私を問はず、全日本學徒の勤勞總動員を取行せしめつつある。「勤勞しつつ學業する」ことは、戦時下學生の範型とせられてゐる。今後は軍管理工場乃至厚生省指定工場に起臥しつつ所定大學に通學する學生を見ることも、不思議に感ぜざるに至るであらう。戦争が一層熾烈化すれば、現在の軍需品生産工場が建物も社長も全従業員も、事實上悉く「徵用」されつつあるごとく、大學の建物も、學長・教授も、全學生も悉く「徵用」される時期の來らざることを誰が斷言し得るか。

〔附言〕(三)に述べたる所は、昨年「關西大學新聞」に述べたる所と骨子に於て同一なるも、其後の推移は刻々に余の豫測の迷翠ならざりし點を證明しつつあるやうに想はれる。

神武調

戰爭・生産力増強の論理

講師 松原藤由

二

近世に終焉を告げる現代の大戦争は中世的戦闘型態と異なり、その規模内容に於いて國家と國民が總體的に問題となる。...

現代の戦闘型態が總力戦であるからには、戦闘力を形成する主動的なる要素は第一に人口の大きさ及びその精神力である。...

三

平時に於いても人口の大きさは國力表象の一つのパロメータである。...

今日、生産力の増強が大聲に叫ばれるのは擴大化の一途をたどる軍需消耗量に對する繼續的補給と人口の増加に基因する生活必需品の階段的消費量に、生産力を對應せしめずば今次の聖戰目的の貫徹はおろか、國家や國民生活の持續的存立をさへ危殆に瀕せしめるからである。...

戦争は武力を構成する手段の高度化と多角化のために、速戦速決を望むとも望み得ずして長期化する傾向を持つ。...

今日の戦争が一面、生産戦であると謂はれるのも實にこれがためである。...

今ぞ、戦ひ愈々本格化するの秋、可及的速に總力戦態勢を確立することが焦眉の急なるは夢寐だに忘れてならない金科玉條である。

今ぞ、國家の興廢を賭する決戦下、可及的速に、我等一億同胞の根源的生產力と一億の觀念的自己維新を結集して敵國降伏の一大使命完遂に火の玉となつて突撃を敢行すべきである。

等航空兵器、輸送船、軍艦等航海兵器、電氣、光線、彈藥、燃料、被服、糧秣等

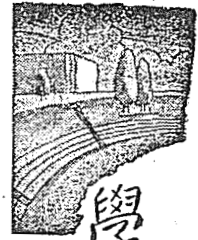
その種類は廣範圍に亘り、その消耗量は恐らく天文學的數字に昇るであらう。...

今ぞ火花を散らす血戦下、可及的速に戦闘力を増強して、富みに横行跋扈せんとする暴逆無道の敵を撃ちてしまふことを切に痛感するのである。

今日、生産力の増強が大聲に叫ばれるのは擴大化の一途をたどる軍需消耗量に對する繼續的補給と人口の増加に基因する生活必需品の階段的消費量に、生産力を對應せしめずば今次の聖戰目的の貫徹はおろか、國家や國民生活の持續的存立をさへ危殆に瀕せしめるからである。...

今日の戦争が一面、生産戦であると謂はれるのも實にこれがためである。...

今ぞ、國家の興廢を賭する決戦下、可及的速に、我等一億同胞の根源的生產力と一億の觀念的自己維新を結集して敵國降伏の一大使命完遂に火の玉となつて突撃を敢行すべきである。



學 內 報

部並に豫科は午後零時廿分より千里山學内運動場に於て無敵海軍に關する神戸學長の訓話があつた。

高専校長に賜謁

高等學校長、大學豫科長、高等師範學校長、專門學校長會議は五月廿一日より文部省に開催され、村上豫科長、正井專門部長出席したが、五月廿四日畏くも拜謁を賜ふ旨仰出だされ、午前九時すぎ官中に參内、

天皇陛下には同十時西溜ノ間に御遊ばされ、拜謁の光榮に浴した。一同は軍國多事の際教學に示させ給ふ大御心に感激し、時局の要請に應じて指導的人材を育成すべき責務の重大なるを痛感し、いよいよ匪窮の誠を效し、もつて一層の御奉公をお誓ひした次第である。

青少年學徒に賜りたる

五月廿二日は青少年學徒に賜はりたる勅語換發の記念日に相當するを以て學部並に豫科は午後零時廿分より勅語奉讀式を擧げ、學長の訓示の後分列式を行つた。

海軍記念日行事

五月廿七日第卅七回海軍記念日當日學

山本元帥國葬遙拜

聯合艦隊司令長官として赫々たる武功を樹てられ、南溟の華と散られた山本五十六元帥の國葬當日、六月五日午前十時五十分を期し、學部並に豫科は千里山學舎に於て、專門部は天六學舎講堂に於て遙拜、默禱を捧げ、學長、專門部長の元帥の英靈に應へて米英擊滅、必勝激勳の訓示があつた。

大詔奉讀式

六月八日宣戰の大詔奉讀日、豫科は千里山學舎、專門部は天六學舎講堂に於て午前八時學式、學部は正午詔書奉讀式の後、各學年報國隊の編成にて分列行進を行ひ、忠靈塔に參拜した。

南方研究所設置

從來千里山圖書館内に南方文庫を設置し、専ら南方關係圖書の蒐集に努めておたが、このほどこれが機構並に制度を擴充して、學長を所長に、教授助教を以て研究所員とする南方研究所を新に千里山圖書館内に設置することとなり、南方

に關する法律政治經濟等一般文化の綜合研究をなし、圖書研究資料の蒐集、調査員の派遣、研究發表、研究冊子の發行等を行ふ豫定である。研究擔當員其の他は追て決定發表される。

人事異動

- 依願解職 教練教師 錦見 一夫
- 書記補 今里 達雄
- 同 依願解職 教練教師 若松 新吾
- 依願解職 教練教師 駒井 鳴美
- (以上五月廿日付)
- 依願免專門部主事 教授 和田 豊二
- 依願免專門部主事 教授 森川 太郎
- (以上五月卅一日付)
- 法文學部勤務ヲ命ズ 教授 和田 豊二
- 經商學部勤務ヲ命ズ 教授 矢口孝次郎
- 同 教授 中村良之助
- 同 教授 森川 太郎
- 兼任專門部主事 教授 中川庸太郎
- 兼任專門部主事 教授 高橋 盛孝
- (以上六月一日付)

校友推薦

五月十三日財團法人理事會に於て、本

研究論集特輯

昭和十八年度研究論集發行に關し、去る五月廿九日學會常務委員會における、協議の結果、用紙割當著減の現状に鑑み本年度は各篇とも特殊問題研究の特輯號として第十四號は九月、第十五號は經濟商業篇を十一月、文學哲學篇を一月、法律政治篇は三月に發行することとなつた。而して現在迄に決定を見てある第十四號の特輯題目、並に執筆者は次の通りである。

- 法律政治篇「日本法學特殊問題」(委員—補田、中谷、吉田)
- 安藤教授、岩崎教授、野村教授、福島教授、柳瀬教授、和田教授、山木戶教授
- 經濟商業篇「大東亞共榮圈經濟問題特輯」(其の一)
- (委員—磯部、三谷道森川)
- 磯部教授、正井教授、三木教授、三谷友教授、三谷道教授、森川教授、高木助教
- 文學哲學篇(委員—賀來、菅、村上)
- 未定

教練查閱日程

決戦下本年度の教練查閱は左の通り實施せられることとなつた。

學部 七月十六日 下川義忠少將
豫科 同 十七日 下川義忠少將
專門部 同 十四日 福見幸孝大佐

昭和十八年度專門部學級擔任

專門部第一部

三年 二年 一年
法科 國歲教授 川上教授 福島 教授
經濟 佐伯教授 三谷教授 高木助教
高商 菅 教授 片岡教授 植田 教授

專門部第二部

三年 二年 一年
法科 福島教授 川上教授 山木戶教授
經濟 菅 教授 三谷教授 中川 教授
商科 國歲教授 佐伯教授 柳瀬 教授
國漢 高橋教授 安川教授 安川 教授
英語 片岡教授 片岡教授 高橋 教授

かくほう抄

○經商研究會—六月十三日午後一時半より天六學舎において開催、森川教授の貨幣價值に關する研究報告があつた。

○村上豫科長—五月廿一日私立大學豫科長會議に出席廿四日拜謁の榮に浴した。六月九日より三日間東京における諸學振興會藝術學會出席

○正井專門部長—五月廿四日拜謁の榮に浴し廿五日專門學校長會議に出席
○岩崎教授—五月十九、廿日の兩日東京中央大學における全私大圖書館會議に出席
○磯部教授—五月廿八日東京大經濟學部創立記念公開講演會に「中小工業の過去現在未來」と題して講演した。

○加藤教授—六月十一、二の兩日東京明大における日本會計研究學會に出席。

○中村教授—大日本言論報國會評議員依頼さる。

○板垣不二男協議員 永く本學協議員として大學の爲に貢獻されたが、四月廿四日逝去さる。遺族は西宮市神樂町六二 彌子坂三郎殿。

○田中佐雄書記 專門部教務課在勤中、四月廿六日三島郡春日村下穂積四七五の自宅において逝去。享年三十八、同氏は昭和六年學部法科を卒業し、昭和十三年十二月學部教務課に奉職、後專門部教務課に轉じられてゐた。

○羽田講師母堂 羽田講師實母は五月九日吹田市下新田三七七の自邸において逝去された。

報 國 團 彙 報

學 部 報 國 團

▽海洋通信競技大會優勝 大日本學徒海
洋教練振興會大阪地方支部主催の第一
回大學高專海洋通信競技大會に参加優
勝せり。

豫 科 報 國 團

▽剛健行軍 六月四日、關急菟坂寺より
高取城址、欽明天皇御陵、榎原神宮に
至る二〇キロの剛健行軍を實施、參加
者五五三名。

專 門 部 第 一 部 報 國 團

△血兵金獻金 アツツ島軍玉碎の大本營發表に感激し學生、生徒、教職員より獻金して金五百圓六拾四錢也陸軍血兵金として獻納の手續をとつた。

▽役員異動 教職員の異動部内部の統合整理に伴ひ、部長の異動あり、左に新任部長のみを掲載する。

▽總務部長兼報道部長 中川專門部主事
▽企畫部長 高橋教授
▽自働車部長 里見書記
▽海洋訓練部長 植田教授
▽體操部長 柔道部長 國歲教授
▽劍道部長 袋井主事
▽陸上競技部長 高木助教
▽水泳部長 垂水書記
▽山岳部長 神屋敷主任
▽教養部長 三谷教授
▽東亞研究部長 川上教授
▽法律研究部長 山木戶教授
▽厚生部兼商業研究部長 佐伯教授
▽藝術部長 菅教授

▽修練部幹事任命 各科第一學年の修練部幹事決定發令された。

〔法〕 猪子弘、内藤英藏、寺西武〔經〕 岡田紀郎、堀江新、上田保雄〔高商〕 具谷泰幸、久保田皎、谷口忠利、北詰智

專 門 部 第 二 部 報 國 團

▽役員異動 教職員の異動並に部内部の統合整理により、部長の異動あり、新任部長のみを掲ぐ。

▽總務部長兼報道部長 中川專門部主事
▽企畫部長 高橋教授
▽修練部長 福島教授
▽自働車部長 袋井主事
▽體操部長

植田教授
▽劍道部長 山田主任
▽柔道部長 國歲教授
▽山岳部長 安井書記
▽教養部長 兼東亞研究部長 川上教授
▽法律研究部長 植田教授
▽經濟研究部長 三谷道教授
▽商業研究部長 高木助教
▽藝術部長 菅教授
▽厚生部長 安川教授

▽修練部幹事任命 各科第一學年の修練部幹事決定任命された。

〔法〕 大島勝己、片岡徹明、辻野安太郎、青木正義、葛谷徳雄〔經〕 神田晴雄、平野慎治〔商〕 山田泉、南部英夫、大堂一〔國漢〕 小串賢、森本博〔英語〕 龜見禎一、小巻利康

▽幹事修練會 六月十二、三日の兩日高山に開催、大明王院にて講演、懇談、闇夜中興の院にて試験會等の修練行事があつた。參加者中川新總務部長外新舊修練、企畫部長學生幹事等五十餘名

校 友 會 費 の 御 拂 込 に つ い て

本月は昭和十八年度校友會費御納入の月で、近く振替用紙をお届け致しますから御拂込を願ひます。會費は年額參圓であります。又は二、三ヶ年分纏めて御送り願へれば幸甚です。尙一時拂は異國債券、貯蓄債券による代納も結構であります。

昭和十八年六月

關 西 大 學 校 友 會 本 部

振替大阪五五五九四番

校 友 會 常 任 幹 事 會

校友會常任幹事會

月例校友會常任幹事會は六月九日(水)午後六時より天六學會會議室において開催、理工科系學科設置に關する母校協議員よりなる調査委員會並に校友會特別委員會の経過報告ありて、校友會評議員會を來る六月廿六日(土)午後六時半より開催することとなり、諸般の協議打合せをなした。出席者一岩崎卯一、榎本信雄、里見復二、樋口哲四郎、松本茂三郎、三島律夫、森川太郎

校友會特別委員會

▽第一部々會 四月廿六日午後七時半より天六學會會議室に開催、理工科系學科の調査経過報告並に中學校設置、上海支部申入の分校問題につき協議。出席者一松本、岡田、榎本、角田、樋口前田、森川の各委員。

▽六月七日午後六時より天六學會會議室に第一部々會開催、岡田委員より文部當局の意見、岩崎委員よりの情報、松本委員長より五月廿八日母校協議員會調査委員會の報告ありて意見を交換した。出席者一松本、生島、岡田、榎本、角田、高梨、樋口の各委員。

▽第二部々會 四月廿六日午後五時半より開催、學内設備改善、内容充實問題機構改革、寮設置、専門部校舎移轉問

題等につき各擔當委員より報告を聴き意見を交換した。出席者一松本、宇佐美、植田、里見、浪江、春原、廣田、三島、和田の各委員。

專一同窓會開催

昭和十六年三月十日創立總會開催以來諸事情の爲定期總會開催の機会なかりしところ六月六日午後一時より天六學會大會會議室にて春季總會開催、參集する者約百五十名、會則一部變更、役員改選、會費徵集方法、昭和十八年度事業方針等の諸件を審議決定し、次いで母校の近狀報告、會員所感ありこの間緊急動議の提案あり幹事會に一任、最後に在學生代表の戰時下學生の決意披露あり一旦閉會、午後四時より海軍報道班員として南方第一線に従軍最近歸還せられたる林信夫氏(本學出身)の「潜水艦と共に」拜聽、戰時局、戰時下と題する南方第一線海軍將兵の敢闘振りを詳に聞き國民の決意を更に固くするあり引續き懇談會開催、第一回三回卒業生諸氏より専門部第一部創設期に於ける學内外の學生の懐ひ出話等あり充分談を盡し豫定より二時間を過ぐる午後九時解散す。

今回出席し得ざりし諸氏の次期總會(秋季十月中旬頃)に出席されん事を希望す。

東京支部春季總會

新緑の好期五月二十五日午後五時より日本橋俱樂部に春期總會を開催した。此の日は生憎種々の差支で參會された校友も少数ではあつたが家族的な集りの事として和やかな食事の後、自己紹介に續いて水間通夫君より母校の近況、學生の動向等を傾聽し戰時下我等の覺悟等に付き懇談し、靄々裡に散會したのは九時すぎであつた。出席者一木郷桂、松澤卓規、吉田吉五郎、加邊力、牧野充安、大月義平、二、米田忠八、藤田實雄、水間通夫

朝鮮支部

第廿八回神宮參拜 五月二日(第一日曜日)午前八時朝鮮神宮參集所に集合、一同參拜を終つて南山亭で休憩、五月十四日に神宮參拜の後京城旭町一丁目、川長で役員改選の件を附議する旨申合せて十時に散會した。

當日の參拜者一岡本至徳、太善明、野田博、松田清、信田芳、山田壽男、在里三芳、小西直意、宮島基河、稻垣鉄五郎、鈴木潔、田中豊次、近藤薫、伊東祐一

關東州支部

四月十八日午後六時より寺内通の海務協會食堂において秀麗會第八十四回例會を開催す。例によつて國民儀禮の後、前回の約束によつて大先輩たる秀島さんにお願ひして我々の活躍舞臺たる關東州に

おける經濟産業方面の狀況について高説を承る。氏は日露戰役後わが日本の大陸進出の史的發展の跡を辿りて關東州の地理學的重要な性について述べられた。次回より關東州に關する重要課題のうち海運問題について高濱さん又は室山さんに、埠頭倉庫方面は守谷さん、商業方面は川野さん、工業方面は北條さん、そして最後に之等の綜合的課題を取扱つて平井さんにお願ひすることとし、所定の時間も疾くすぎ、八時四十分學歌を高唱して散會した。

出席者一高濱直一、室山宇太郎、飯田昇、川野勳平、秀島全治、守谷賢治、松本茂、池内輝一、平井三郎、山下八壽男、濱島久義、荻原博、北條茂義、松田久雄、荒川彌一郎、竹若隆三、小川立朝

陸法會の總會

千里山法學クラブは陸法會と改稱し、本年度前期定時總會を五月廿八日午後六時備後町野村クラブに開催、會する者十七名、最近中文職線より五ヶ年振りに歸還した會員佐藤忠夫君も見え、議事終了後會長中谷先生の「戰時行政管見」と題する御講話があり、戰時行政を話題の中心として會員相互の法學的教養を昂め、且つ親睦を深める上において資する處多く午後八時閉會した。

因に會員諸兄に告ぐ。今後毎月一回第三金曜日の午後五時より六時半頃まで月例集會たる常會を開催する。詳細は理事

金山正信君(千里山關大研究室氣付)宛
照會された。
尙振替口座開設したので會費未納の方
は年額壹圓也至急拂込まれたい。阿倍野

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字
は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業
を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

會(振替大阪三八五二三番)(南出總事
理事報)

大 法

阿部 正貫(8)(東京市麹町區大手町

一ノ六、安田保善社業務部)

大田 正夫(5)京都市東山區南溪町鶯
丘三五

黒坂 嘉徳(二五)北河内郡守口町金下町
一二七(旭區役所市民課)

島田貞之助(14)堺市寺路町一〇

瀬戸 茂夫(5)清津府北星町一
玉中 啓一(7)(滿洲國三江省佳木斯
市、第七軍管區司令部)

土井 美弘(一五)(神戸辯護士會副會長)

西村 久吉(12)(比島派遣軍、比島軍
政監部ノ一八)

東野 登(13)東淀川區飛鳥町二〇一
(大阪遞信局貯蓄部保險第一課)

南出 弘(11)奈良市北市南町三二

角谷 文雄(9)東區徳井町一ノ一二

深尾 弘(16)東京市赤坂區青山南町
五ノ七八、吉澤岩男方(内務省警保局
警務課警備係)

石田 末夫(?) (大阪府食糧管團人事
課人事係長)

織田、正一(4)泉南郡信達町市場官倉

河田 矩次(9)(東京市日本橋區堀留
町二、織雜製品統制協議會製品第一部
監査課)

武笠 幹雄(14)北京内一區小方家胡同
一八號

久保田直敏(五)(日電興業會社會計課
長)

柴田 六雄(三)神戸市灘區新在家中川
三ノ四七(阪神電氣鐵道會社厚生課長)

坂東 勇治(7)計理士事務所を南區竹
屋町五一に移轉(電南二〇一六)

崎谷 三郎(12)(新中央通四三、滿
洲國通信社編輯局整理部)

平岡 龍乘(9)(朝鮮全羅南道、木浦
法院支廳檢事分局)

朴澤 丰植(13)慶南宜寧郡富林面新反
郵便局前、東昌商店(東昌商店自營)

天野 實(8)(新京特別市大同大街
一九〇三、滿洲土地開發會社)

荒木 正治(10)京都府久世郡小倉村伊
勢田

大上 司(10)都島區生江町四四三
(大阪財務局會社監査課)

片岡 珪(15)奈良縣山邊郡丹波市町
布留(北澤商店)

片山 光(16前)尼崎市水堂旭五八

木村 忠篤(11)五月十七日上谷喜代子
嬢と華燭の典を擧ぐ、新居滋賀縣蒲生
郡中野村中野九〇一

辯原 良尚(14)(大阪製鋼會社石原工
場)

井上 正(8)(蒙薩薩拉齊財務局副
局長)

上岡 健行(9)中河内郡繩手村河内八
六九(大阪市土木局新平野川改修工事
主任)

上田重太郎(11)兵庫縣氷上郡新井村田
路四一二

小椋 敏藏(2)(大阪府食糧管團監査
課長代理)

尾崎 幸一(11)浦和市仲町三ノ二〇、
(内務屬、内務省警保局警務課防犯
係)

栗田 豊平(2)(船舶輸送指令部派遣
員屬託)

太宰 明(三)(京城市會議員に當選)

高橋 進(10)(天津特別市興亞第一
區芙蓉街、華北電信電話會社天津中央
電話局)

都野守良雄(8)萩市今古萩三四

中山徳太郎(三)旭區森小路町五六五

西山 儀助(明37)岡山縣淺口郡鴨方町
深田一二三六

藤江 良三(16後)兵庫縣揖保郡林田村
上樽

安喜 正雄(4)中河内郡八尾町山本三
九七ノ一

横井 信義(12)(上海北四川路五二三
號、華中鹽業會社)

伊藤 幸八(16前)吹田市松ヶ鼻町一
〇四、武山信次方

昭14大法 山本貞之助 島田貞之助

留川 彌直(大3專商)鶴の山鹽業會社
取締役に就任中の處六月三日逝去、遺
族豊中市上野區九一、留川彌生殿

藤井 義成(明31法)元判事、岡崎市に
於て辯護士開業中の處五月一日逝去さ
れた。遺族岡崎市久後崎町宮前一七、
嗣子藤井とよ殿

比島の校友

新比島建設のため各方面に活躍の校友
は相當の數に上つてゐるが現在の處十分
なる連絡つかず全貌を明にするに至らな
いが、大正十四年法科出身松下電器産業
専務前川信之助氏比島出張の砌、去る三
月六日マニラホテルに司政官橋本利八氏
(大十四法)高橋商店副社長高橋良美氏
(昭七大經)軍參謀部附陸軍中尉中村進
氏(昭七商)の諸氏と會して我等が描く
大構想を展開したのであつた。